（７）　対抗植物による土壌線虫の密度抑制

対抗植物は、土壌中の有害線虫の密度を減少させる効果があり、輪作体系に組み入れることによって線虫による作物被害を軽減することができる。

ア　ネグサレセンチュウに対する対抗植物

・マリーゴールド（キク科の植物）

一部のダイコン産地などではすでに実用化している。防除効果は非常に高く、２～３作期間の防除は可能である。アフリカン種（アフリカントールなど）やフレンチ種（セントールなど）で効果が高く、メキシカン系品種はやや劣る。

イ　ネコブセンチュウに対する対抗植物

ここにあげた対抗植物はかなり高い防除効果がある。ヤマトイモなどネコブセンチュウに特に弱い作物は、対抗植物の収穫後、Ｄ－Ｄ剤などの土壌消毒剤を併用する。

(ｱ) クロタラリア（マメ科の植物）

a　*Crotararia spectabilis*： 細葉の種で、丸葉の種と比べ初期生育に優れる。

b　*Crotararia juncea*： 丸葉の種で、細葉と比べすき込みが容易である。

詳細は、農研機構ホームページに掲載されている「緑肥利用マニュアル」（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/134374.html）のクロタラリアの項を参照。

(ｲ) ギニアグラス（イネ科の植物）

種々の品種があり、品種により防除効果が異なる。

※　注意事項

・対抗植物の生育ムラ等で雑草が生えるとそこで線虫が増えることがあるので、は種をムラなく行い、覆土・鎮圧して発芽率を高める。

・対抗植物は、夏季を含む２～３か月以上栽培し、根を土壌中に十分に張らせる。

・地上部をロータリー等ですき込むとより効果が高いが、夏季で１か月程度の分解期間を置き、後作を作付する。

・対抗植物によっては目的外の線虫を増やすことがあるので注意する。